

# PRO-LIFE

## news

中絶に反対する運動

1997年6月

### 胎児を守る運動

## 立派な父親

社会はゆっくり、ほとんど気づかないうちに変化して、父親と子どもの関係のあり方を変えてしまいました。数十年の間に、父親は家庭内の道徳的なりダーシップの多くを、恐らくほとんどを失ってしまいました。大部分の父親は、この父権の衰退と、それが子どもへの将来の幸福に与える深刻な影響に気づいていないのです。

父親は、ただ、家族の快適な暮らしのために必要なものを与え、そして自分もそれを共有することで父親の役割を十分に果たしていると考えている人が多いのです。でも、それは間違いです。不幸なことに、彼らは子どもが高校に入るまで、さらにはもっと後になって子どもが大人になって自分のもとを離れていくまで、自分達がどんなに間違っていたかが普通わからないうのです。

子どもが父親の強さに尊敬の念を持たずに成長した場合、その子ども達の道徳的発達是不十分なものになります。大人として彼らはどこかバランスを欠いている、つまり未熟であったり、決断力が無かったり、自己中心的であったり、宗教心が無かったり、遊びや楽し

みに心を奪われたりするのは、彼らに心奪われたいというのではなく、彼らの生活は落ち着きがなく不幸なままなのです。離婚する羽目になる可能性は五分五分なのです。彼らは必死になって専門家の助けを求めたり、今まで経験したことのない父親らしい指導をどこかに求めたりすることがあります。

父親から与えられる楽しみや便利さが、子どもに必要なことは歴史が証明しています。正常かつ自然に必要なとされるものとして、彼らに本当に必要なものは、確固とした人格と良心的に生きた男らしい手本なのです。その手本とは、私達が最も尊重している美德、つまり、宗教的信念、積極的な思いやり、批判的洞察力、厳格かつ慈愛に満ちた責任感、自制を生活のなかでいかに実践するかを子ども達に教える男性なのです。子ども達は無意識のうちに、父親が英雄だと感じる必要があるのです。

子ども達に英雄のように感じられる父親は皆、子ども達の生涯の尊敬の対象なのです。そのような父親はかけ離れた近付きがたい厳格な権力者ではないのです。それどころか、子どもの最高の友であ

り、無意識に父親以外の者との間の友情の手本になっているのです。幸せや自信やユーモアや知恵の源なのです。父親と父親の価値観への子どもへの尊敬は、青年期を安定させ、仲間の影響や物質主義の誘惑をはねのける役目を果たすのです。この深い尊敬の念は、人間としての生き方全てへの尊敬の念と同様に、強さを感じ取ることに由来するということを私達は強調しなければなりません。

今日のような豊かな環境においてさえ、子どもから尊敬を受けている父親もいます。そのような父親とその妻は立派に子育てを行なっています。当然、立派な親とは立派な子どもを育てている親であると言っているでしょう。どうして立派な子どもを育てることが不可能なことなのでしょうが。

このような父親の中には、積極的に外向的で家庭でも職場でも自然とリーダーになっている人もいれば、物静かで上品で人の目を引くようなタイプの人でないけれども非常に立派な人もいます。また明らかに身体的な限界を持った人もいます。たとえば、太りすぎであったり、運動ができなかったり、医学的な障害を抱えていたりする人もいます。気質や身体的な欠点と無関係に一つだけ彼らに共通したことがあります。それは、しっかりとした人格を持っていることで、妻も子どもも父親を深く尊敬して

いるということです。

そのような立派な父親に共通している点を以下に述べてみましょう。

1. 立派な父親は妻と協力的連帯感を持っています。

彼らは家族に威張り散らすことも無視することもしません。彼らは妻の犠牲や長時間にわたる仕事や、愛情あふれるこまやかな気遣いに心から感謝しています。さらに重要なことは、彼らは子ども達の前でこの感謝の気持ちを表現します。意識的であれ、無意識的であれ、そのような父親は子ども達の母親の優れた特質に引き付けるのです。そして、この感謝の気持ちを共に感じ、母親を尊敬するように子ども達を仕向けていくのです。

多くの父親がこの重要な生活の事実を見過ごしています。つまり、男性は職場において、勤務評定や昇給や昇進などの形で自分が認められていることがわかります。しかしもし家庭で一日中家事をしている妻が、夫からそのように認められないならば、誰からも全く認められないことになるのです。子どもが恩知らずに育つのは当然のことです。もし父親が子どもを母親への感謝の気持ちに導いてやらなければ、母親は感情的な重荷を背負い、報われない思いに促わられてしまいます。両親に対する子ども

の尊敬は、両親のお互いへの尊敬から始まらなければなりません。

2. 立派な父親は、大人の男性や女性へと成長していく子どもの将来の人格を長期にわたって考えています。

彼らが考えているのは精神的な強さのことであって、職業選択のことではありません。彼らは自分達の親が絶えず考えてきたのと同じ人格に焦点を当てた間かけを自らにするのです。「私達の子どもを責任ある親に育て上げるために私と妻は今何をしなければならぬのだろうか。」と。言い換えれば、彼らは自分達は今、子どもを育てているのではなく、大人を育てているのだと考えているのです。

3. このような考え方の結果として、彼らはしばしば妻と、子どもの人格の長所や短所について語り合います。

このような男性は、自分の妻がこの分野においては自分よりも敏感で洞察力があるかもしれないことを知っており、妻の判断を尊重しています。やり方において妻と意見が合わないことがあるかも知れませんが、彼らは何らかの合意に達するように

決意をしています。彼らは子どもにとって両親の意見が一致している、特に嫉の問題で一致している姿を目にすることがいかに大切かがわかっているのです。さらに、子どもの前で両親が言い争うことがあっても、激しい口論にならないようにお互いが気をつけています。両親の意見の不一致が、妥協によってうまく解決される姿を見ることは子ども達にとって有益なことですが、口論は家族の団結にとって脅威となります。

4. これらの父親は子ども達とよく話し合いをします。

会話が家庭での最も一般的な余暇の過ごし方となっています。父親は自分の経験から、子ども時代のことや家族の暮らし、仕事上の責任、母親との交際、心配事や関心事、自分の昔の過ちや滑稽な大失敗、自分が尊敬する人物との関係、自分の意見や信念などを語ります。また祖父や先祖や家族の名譽について語ります。このことは彼らが子どもを退屈させる、あるいは自分の考え方を押しつけるということを意味しているのではありません。子ども(特に青年期初期の子ども)は全く話しながら初期の子ども)は全く話しながら辛い時があります。しかし彼らは辛抱強く子どもが口を開くのを待ちます。このような会話の結果と

して、子ども達は父親の考え方が全て分かるようになります。やがて、子ども達は父親の経験や判断を尊敬するようになります。

5. そしてもちろんこのような父親は子ども達の話にも耳を傾けます。

彼らは口には出していないけれども、言おうとしていることを感じ取るうとします。彼らは子ども達の心に起こっている変化が分かるようになり、人や物に対する子ども達の判断の舵取りをします。彼らは子ども達のプライバシーを尊重します。彼らは子ども達の成長に対して子どもを誉め、子どもが将来どのような仕事をして生計を立てるかに関わらず、立派で素晴らしい大人に成長してもらいたいという心からの期待をはっきり打ち出します。

6. 立派な父親はテレビを見る時間を最小限に控えます。

彼らは、テレビが家族の団らん時間を奪うことを知っています。テレビは会話を奪います。見る価値のあるものが放送されている時はいつでも、できるだけ家族全体でそれを見ます。そ

れ以外の時は、テレビを切っておき、話をしたり、ゲームをしたり、読書をしたり、勉強をしたり、年間の大部分の時間を家族として共に過ごしたりして、子どもと建設的な時間の使い方をします。テレビの「子守り」の機能を短縮すれば、それによって母親の仕事が増えることになるので、父親が協力します。ここでも父親のリーダーシップの下で、家庭はより活動的で、その結果より健康的なものになるのです。

7. 立派な父親は嫉を、罰や単なる行動規制とはみなさず、むしろ子どもに自制心をつけさせる手段とみなしています。

彼らは、「ノー」という言葉を愛情に満ちた言葉だとみなしています。この愛情に満ちた言葉を使わなければ、子ども達は自分の衝動を抑えるという感覚を持たずに成長する可能性があります。今日の麻薬の氾濫している文化においては、この弱さは命取りになるかもしれません。長期の見通しから、このような父親は子どもが後になって自己管理ができるように、今、子どもが自分の恐怖心を克服することに、訓練と激励が必要なことを理解しています。こういった理由で、このよう

な父親は必要な時は、適度な体罰を用いる事を躊躇しません。ここでいう体罰とは、特に親の権威に反抗的な態度を取った時に、重大な教訓を教えるのに役立つちょっとした一時的な痛みをささしています。涙はすぐに乾き、痛みはなくなり残るのは善悪のけじめなのです。そしてこのことが大切なことなのです。嫉というのが愛を持って行なわれるならば、それは親に対する尊敬の気持ちを作り出すこととなります。私達も気が付いていることですが、この尊敬が他の全てのことに対する基礎となつていっています。

8. このことに関連して、立派な父親は自分の権威に自信を持っています。

彼らは「父親」というのが、選挙で選ばれた役職でないことを知っています。父親としての権威は子ども達が話し合つて決めるものではありません。それは父親としての仕事に伴うもので、神から与えられ、その人自身の自由意志で担われる責任に由来するものなのです。従つて立派な父親は一時的に嫌われることを恐れませんが、子どもに対する愛情と長い目で見て子ども利益となることのために努力します。この愛情と努力が子どもの

傷ついた感情や、正しいことを時々したくなくなる気持ちを逆転させるほどの強さを子どもに与えるのです。

つまりこのような父親は自分が認めないことを子どもに許可しません。下した決断の正当性に心のなかで疑問を持つていても、彼らは決断を下し、それを変えない父親としての権利に全くの疑念を抱いていません。

9。立派な父親にはたい  
てい、多くの親友がいる  
ようです。

その家庭には、隣人や親戚や仕事の同僚や子どもの頃からの友人などの客がいつも出入りできます。このよつな人々は、また子どもと親しく接してくれる大人、つまり牧師や教師やコーチや子どもの友達や両親等が助けしてくれる事を厭いません。深い愛情は私達の中の最もいいものを引き出してくれます。そして子ども達にとって、これを目にするのは子どもへの役に立ちます。子ども達は、全ての友情の基盤となる相手に対する礼儀正しさや尊敬を父親と母親が相手に示している姿を目にします。さらに子ども達は誰を両親が尊敬しているか、なぜ尊敬しているか、どのように敬意を表しているかを知るのです。

子どもが青年期へと成長してゆくにつれて、両親には、信頼してアドバイスや励ましを求められる経験を つんだ協力的な人々とのつながりができます。この協力によって、やがて両親の判断と自信が確固としたものになってゆくのです。

10。立派な父親はしばしば、  
深く積極的な宗教心を持っ  
ています。

子ども達は父親が祈り、教義に基づく道徳観の確立に大いに関心を持つている姿を目にします。

このような宗教的な考え方は、父親の子どもへの嫉の仕方直接影響を与えているように思われます。彼らは専制的になることも自由放任にすることもありません。というのはこの両極端は基本的に自己中心なことであるからです。しっかりとした良心に従って生きようとする努力と共に、神様が父親に注ぐ愛情と同じ愛情で、父親もまた子どもに接するようにはするのです。このような男性はいかに家族の幸福が神様の慈愛あふれるご加護によるものであるか気づいています。子ども達の未来の生活は完全に神様が守って下さるのです。これらの男性は、祈るといふ生涯にわたる習慣が自分が

子ども達に教えることのできる最大のものであることを知っています。そして希望というものが、これから先に待ち構えている嵐に子ども達が出会った時に、彼らの若い人生にとって支えとなるでしょう。

別の見方をすれば、全ての世代の子ども達に布教が行なわれなければならぬという一ことを知っています。そうでなければ、子ども達はたやすく信仰を失うことがあるからです。千年以上もた信仰心がたった一世代で全く消滅してしまうことが起こり得るのです。今実際このようなことが私達の周囲で起こっているのです。キリスト教徒である父親であれば誰でも、子どもにこの信仰心を伝えていくという仕事は非常に大きな責任なのです。重要さにおいて、それに匹敵するものは他に何もありません。

11。立派な父親は子どもに  
「心が貧しくあるように」と  
教えます。

裕福でありすぎることは、子どもばかりでなく大人もだめにすることがあることをこのよう男性は知っています。それは歴史ばかりでなく、宗教の重大な教訓です。聖書の多くのところで語られているように、富はこの世のそ

して永遠の現実への私達の目を閉ざします。神様は私達を単なる「消費者」になるように創られたのではないのです。

どのようにして父親は子どもに貧しさのこの精神を教えるのでしょうか。いろんな方法があります。彼らは子どもと共に家での働き、成就感と共に努力と結果の関係を教えます。彼らには必要以上に小遣いを与えません。彼らは子ども達に物をすぐに与えず待たせません。そして可能なら、それらを自分で働いて得させます。彼らは貧しい人のために自分達の時間やお金を気前よく与え、子ども達にも、強制はしません。そうするように勧めます。彼らは家庭を高価な機器や遊び道具でいっぱいにするとはしません。彼らは節約し、将来のために貯蓄をします。そうすることで子ども達に重要な教訓を教えるのです。その教訓とは、「お金とは道具であり、愛する者や困っている人に奉仕する手段である。そしてお金とはそれだけのものなのだ。」ということなのです。

12。最後に、最も立派な父親  
はいつも家族の幸せを仕事よ  
りも優先しています。

彼らは父親の無関心によって子どもが深刻な心の傷を受けることを知っています。そして昇給や昇進やプロジェクトの完遂といった仕事の面でのいかなる成功も、この心の傷を埋め合わせることはできないことを知っています。

悲しいことですが、多くの男性が中年の後半や退職年令に達して、自分が今までの人生でしてきたことに失望することがよくあります。一生かかって一つの事業や業務を確立したけれども、それらが結局なくなってしまうのを目にする人々もいます。時代は変わるのです。古いものは新しいものにとって変わられるので、目標にはなりません。人生の目標は変わらぬものだから、仕事は人生の目標にはなり得ないのです。

への寛大さ、暖かく敬意に満ちた友情、成就された仕事から来る満足感などからやってくるのです。たとえばあなたが無一文であつても、このようなことが人生の本当の宝なのです。

しかし子どもについてはどうでしょうか。子どもの魂は不滅だから、子どもは永遠の人生を

# 父親の利害

持っているのです。子どものこの世における、そして永遠の幸せは、人生の最初の20年間の父親からの影響に、大いに左右されるのです。20年とは短い時間ですが、一度しかないのです。神様はその20年が人生で一番大切な期間だと定められているのです。両親が子どもを立派に育てるチャンスは一度、ほんの一度しかないのです。

のちの人生において、立派な父親は自分達の犠牲の果実、つまり立派な子ども達を享受することができるとです。彼らは自分達の息子や娘を、両親の生き方に基づいて生きていく自信に満ちた、責任ある人間として目にするのです。神様は私達全てに父親と母親を敬うように命じています。子ども達が捧げられる最大の敬意は、両親の良心と人格を自分のものとして取り入れることなのです。

ジェームズ・ステンソン

三十年近く、中絶論争は妊娠した女性の権利と胎児の権利に終始してきました。それは(中絶の合法化に反対する)子どもの代弁者と(中絶に賛成する)母親の代弁者との対立となってきました。

その議論の間ずっと、私達はその問題の第三の当事者、つまり父親からの、あるいは父親についての意見を耳にしたことは驚くほど少なかったのです。

たとえ男性のことが話題になった時でも、それは普通、男性がその問題に何らかの正当な利害関係があるということ否定するのが目的でした。女権拡張論者は、中絶に反対する男性を、女性に子どもを産むことを「強制」したがついてると非難しています。そして中絶に賛成している男性は、その問題を女性の権利の点から論じています。このような状況の中で欠けているものは何なのでしょうか。

中絶というこの問題を実際に経験した人であれば誰でもその答を知っています。多くの男性は自分勝手な理由で中絶に賛成しているのです。彼らは、たとえ

子どもが結果として生まれても、責任を負わずに性的な関係を続けられることを願っているのです。しかし、この真意が公の議論の場で表面化することは決してありません。私は、「たとえ私の妻が、愛人が、またはガールフレンドが妊娠したとしても、子どもを養育する義務を負いたくはありません。」と男性の中絶の支持者が率直に言うのを聞いたことはありません。

しかしこのことがいつも、中絶というものがそもそも発生する主な理由なのです。中絶に賛成の人々は、中絶の決定を、男性の支配からの女性の独立宣言、つまり「自分の体を支配する女性の権利」の主張と表現しているのですが、実際には、たいいてい場合、女性は自分が男性に依存している、男性の支配下にあるということに気づき、中絶が究極の醜い選択肢であると感じることになるのです。

中絶が「権利」となる以前は、女性が妊娠させた男性は、その責任を取るようになっていました。二人が未婚の場合、男性がなすべきことは結婚の申し出をす

ることでした。今男性は妊娠させた女性に、「どうするつもりなんだ。」と尋ねればそれでいいのです。その問いからは、「それは私の問題ではない。」という意味が読み取れるのです。あるいはもつと露骨で、中絶をするようにとプレッシャーをかけている、または中絶をせずに子どもを産めばその子を養わないぞと、脅しているのかもしれない。いずれの場合でも、若い女性にとつて、その子を、または自分を見込んでいない男に妊娠させられたことに気づくことは、絶望的で屈辱的で、破滅的な経験なのです。

もし望まれない子どもを押しつけられない権利が女性にあるならば、男性にもその権利があることになるのです。もし中絶の決定権が女性だけのものであるならば、まさに生死そのものが全く女性によって決定される子どもを養育することを男性に強制することは不合理なことになり思われます。合法的な中絶という前提が性の革命の原則なので、つまり、人々は結果として親になるということなく、性的な喜びを楽しむ権利があるということなのです。このことは男性にも女性にも当てはまるものでなくてはならないことは確かなことでしょう。だから、もし父親が望まない子どもを出産するこ

とを女性が選択すれば、男女の平等という考え方によって、中絶すべきか否かという決定と同様に、その子どもを養育するという負担を女性だけが背負うことを要求されることになるように思われます。実際、怠慢な父親に子どもの養育をするように強制することはきわめて困難なことなのです。

一方、胎児に生きてほしいと願っている男性は、もし女性が中絶を望めば、法律的にどうすることもできません。いずれにしても、その子は、親としての責任を負いたがらない方の見方をする法律によって、両親のなすがままになっています。

男性が依然としてマスメディアを支配している、従って公の場での論争を支配しているということを考慮すれば、マスコミで男性の利害が主張されることがないことは、奇妙なことのように思われるかもしれません。しかし、そのことが男性の利害が主張されない、まさにその理由がもしもありません。中絶を合法的なままにしておくことを望む権力をもった男性は、自分の本心を女性の権利という言葉の中に隠すのです。なぜなら彼らの本心はあまりにも汚いので、表面に出せないからなのです。

合法的な中絶の主な受益者は、「開放された」女性ではなく、性

# 辛く寂しい悲しみである不妊症

的に無責任な男性なのです。「権利」といつ名において、すべての正常な社会にいつも存在してきたことを忘れ去り、かつて下劣な男とか、女たらしとか、色魔と呼ばれていたにもかかわらず、今では正常だと考えられているような男に味方をする刺激的な制度を造りだしたのです。

その新しい制度は、「免責のセックス」と呼ぶことができるでしょう。だれもその結果の責めを負うことはないのです。それにもかかわらず、免責の自動車保険と同じように、「事故」が起きた時には、女性に現実の苦しい結果が生じるのです。

性の革命の本当の勝者は男性、それもまちがった考えの男性なのです。そして、男性が自分の本当の気持ち女性にしゃべらせているとしても、中絶が他の誰よりも彼らの本心なのです。

ジョーゼフ・ソプラン

夫と私は、結婚した頃から三年以上の間、命というものを大切に思ってきました。ですから私達の双方に治療しなければならぬ不妊の問題があると知った時はショックでした。私達は神のメッセージは何なのか、と悩みました。「あなた達の将来には子どもは含まれない。」のか「私を信じれば奇蹟を起こす。」なのか。

この前の春は特に辛かった。私の周りの全てのもの、全ての人、新しい命で満ちあふれているように見えました。今年の母の日は苦痛でした。母の日の祝福を受ける為に、そこに居るすべての母親に立ち上がる様にと神父様が教会で言った時、残って座っていたのは数人の女性だけでした。職場で私の隣に座っている同僚が最近妊娠した事を発表し、それ以来、彼女にお祝いを言う人の列が後を絶ちません。それは当然の事なのですが、しかし、それは私の痛みを増し、何故私達にはまだ順番が回って来ないのかと怒りを感じさせるのです。

夫と私が属している教会のグ

ループはたくさんの子ども達に恵まれた家族が多いのです。産まれた赤ちゃんを見ると畏敬の念と共に心を打たれますし、知り合った子どもがどの様に成長して変わっていくか見たいと思います。けれど果樹園の中の腐った木の様に、中に溶け込めないのだから、後どの位このグループに居られるのかしら、と考えてしまうのです。

私達がどんなに悩んでいるかを話すと、皆には、「何故養子をとらないの」とか、「ただ気を楽にしないよ」とか、「等々、すぐに出る」「答え」や「解決法」があるようです。養子とはとても個人的な問題で、すべての人に向いている訳ではありません。神が何組かのカップルを養子をとるようを選び、彼等が養子を育てて行く月日を頑張っていける力を与えられるのだと思います。

人が「ただ気を楽にしなさいよ」と言つ時は、それがそんなに単純な事ではないと知らないのです。自信の無い性交は、リラックスできないのです。調査によると、長い年月の不妊の未やると妊娠したカップルのほとんど

のケースでは、妊娠するのに「ただ気を楽にした」のではないのです。

今私は自分が悲しみの五つの段階を通っていると思います。今は怒りの中に居ます。これを経験しない人にとっては、毎時間ではないにしても毎日毎日、出会う出来事によって振り回される感情を理解する事は難しいでしょう。あなたが聞いてくれて祈ってくれるだけで、支えになるのです。誰かの為にそばに居てくれるだけで充分なのです。今私達に出来る事はただ自分達を大切に、待つだけなのです。

95pp7

COL 9-10 /

## 出生前診断

高齢出産の妊婦さんには、ダウン症の胎児かどうか、血友病の因子を持つ妊婦さんには胎児にもその病気があるかどうか、また、筋ジストロフィーなど染色体異常があるかどうか等、医療技術が発達した現代、出生前診断を願う妊婦さんが多いと言われています。また、それを勧める医療機関も多いようです。

私達には、この出生前診断とその告知は本当に必要でしょうか。この診断をうけ、胎児に障害が見つかった場合、大抵のお母さんは、動揺して、「障害者もその家族も幸せになれない」とする社会一般の考えに悩むでしょう。その時、日本では22週まで中絶は可能です、という言葉が聞けば、人間の弱さから悲しい、早すぎる決断をしまう可能性が高いのではないのでしょうか。

でも、障害者もその家族も必ず幸せになれないということではないのです。長い日にちがかかるともいれませんが、「あの時、中絶せず、この子を出産してよかった」と深く喜べる家族になつた方達もおられるのです。

もし、出生前診断を必要とするのであれば、それはお母さんへの告知のためではなく、赤ちゃんが生まれてくるその瞬間の医療準備とケアのためであって欲しいと思います。

# オランダにおける安楽死・その簡単な歴史

一九七三年以前は、オランダでは安楽死は法律で認められていませんでした。その

年、末期状態にある母親をモルヒネで安楽死させたことで、一人の医師が逮捕され裁判にかけられました。裁判所はその医師に、一年間の執行猶予付きの禁固一週間の判決を言い渡しました。

これが先例となり、裁判所はすぐに、いつ患者の死を医師が補助することが許されるかに対するガイドライン、例えばなんらかの話し合いが必要であるとか、患者の病状が末期状態でなければならぬとか、患者自身が安楽死を望んでなければならぬ、といったものを作りました。

一九八四年王立医学協会は、安楽死に対して「慎重な行動を取るための規則集」を発行しました。これらは医師が患者に病状を知らせること、(患者がそうすることに反対しなければ 患者の近親者に相談すること、一人以上の他の医師に相談すること、書面での記録を残すこと、そして子どもの場合、両親もしくは後見人の同意を得ることを求めています。

一九八五年、裁判所は、多発性硬化症の少女の場合、「末期的病状」という必要事項を削除しました。彼女の病気が治療不可能であったので、いつまで生きられるかは問題になりませんでした。(もっとも最近のケースでは、全く健康であるけれども、ひどい鬱病で苦しんでいた女性が希望通りに安楽死さ

れました。)

一九八十年代の後半までに、ダウン症候群や二分脊椎のような障害をもって生まれた赤ちゃんを「安楽死」させることは当たり前前のことになっていました。

アムステルダムで、三人の看護婦が全く同意を得ずに昏睡状態の患者を数人安楽死させました。彼女達は、殺人ではなく、医師に相談する義務を怠ったということで、有罪になりました。

一九九十年、オランダの医師は一一八〇〇件、つまり国内での死の9%の死に関わりました。このうち半分が患者は望んでいないのに安楽死させられたのでした。

一九九五年、国会はこれらの裁判所の決定を、法律として成文化した法律を可決しました。

Original: Tale

## 一つの意見

老人や衰弱した人や不治の病いの人に対して、あなたの状態は悲観的ですよとか、死んだ方が楽になりますよとか言うことは本当の意味での相手に対する尊敬ではない。安楽死は、それまで病人や老人の肩にのしかかっていた沢山の悩みを、最終的に葬り去ってしまっただけである。殺してしまうよりも、もっと創造的に愛と尊敬の念を表わす方法を私達は見つけられるはずである。

## 事務所便り

五月の母の日が続いて、今月は父の日です。毎日の仕事に大忙しのお父さん。お父さんの働きのお陰で、今日も家族は無事生活できることに感謝しながらも、段々仕事オンリーになって行きそうなお父さんの後ろ姿を見ながら、家族は何を考えるでしょうか。「子どもは親の後ろ姿を見ながら育つ」という言葉がありました。今の子ども達はそうでしょうか。子ども達の成長年齢にもよるでしょうが、特に、男の子が思春期になった頃、男の子にとってお父さんは成長していく上での道標になることでしょうか。例えば、「お父さんのようになりたいと考える子」「お父さんのようになりたくないと思える子」様々です。そして、もう一つは、お父さんとのふれあいがなく、「共感も反発もない子」。そんな子ども達のために、子どものお母さん任せにしないで、正しい判断力を子ども達に示すために威厳を持って、家庭に戻つてと全てのお父さん方に事務所よりエールを送りたいと思います。

昨日、4月20日の日曜日にはミサの後、シスター築沢の「命の大切さのみつめて」と題して、話し合いの会を女性交流会が主催されました。シスターは中絶の話をしたと言う事でしたので、プロ・ライフの事務所からも参加して、どのように会を進めようかと前もって話し合いながら、準備していました。当日は男性も、そして若い学生さんも参加してくれ、皆からの様々な考えを聞かせていただけで有意義な日となりました。その中でも二名の方がボランティアでこれから時々事務所のほうに顔をみせてくれることになり、うれしく思っています。